【福島大学むらの大学アーカイブ 31】【飯舘 Chapter３】
桜で紡ぐ村民の絆～息子を想う気持ちがつないだ 3000 本～
会田征男さん・ツタ枝さん

インタビュー日時：2024 年 10 月 13 日
インタビュー場所：会田家
聞き手：高橋舞飛、井上琉雅、高橋沙衣、久保田彩乃

プロフィール
会田征男さん、昭和 19 年 9 月 17 日。80 歳。出身は飯舘村。実家で養蚕を営んでいた。会田ツタ枝さん、昭和 21 年 7 月 16 日。78 歳。出身は飯舘村の隣の飯樋。現在は 2 人暮らし。
自宅の新築祝いをきっかけに植え始めた桜だが、震災後は飯舘村復興のためにボランティアと共に桜を植え続け、現在は手入れを中心に活動している。

１．今まで

―幼少期から出会いまでの道のりは？
ツタ枝：小中学校は別々。この人（征男）は草野小学校。私は飯樋小学校というところ。

征男：まだ、その当時、合併してなかった。合併が昭和。合併しても学校はそのままだったから。
ツタ枝：（征男は）草野中学校で、（ツタ枝は）飯樋中学校。そういうことで 2 人は親戚といっても、そんな見たこともあんまりないんです。

征男：高校について僕は農高（相馬農業高校大館分校 、後の飯舘校）。

ツタ枝：私は川俣高校。バスで通ったんです。すぐ目の前が停留所だから 1 分も 2 分もかからない。降りていくと、すぐバスが来るのね。そこでバスに乗って川俣高校まで行きました。高校を出てからは農協の方に勤めていながら結婚しなくちゃいけないということになって。でもな、母親がこんなに言ってるんだから結婚するしかねえかなみたいな、そんな気持ちで嫁いできたんですよ。だから、このうちに来てからは勤める人が 1 人ぐらいいないと、やっぱり、うちの中に現金とってくる人がいないと生活も、子どももお父さんの兄弟も、ずいぶん多いということで、子どもたちに給食費だとか学費とか何かいろいろやるのに、私が勤めることって、なんぼでも足しになってもらうという気持ちで、私は勤めたんです。その後、十何年も勤めたんです。農協に。

征男：俺は昭和 48 年ごろに養蚕を山に開墾して始めて 11 ヘクタールの桑園をつくった。それで 25 年くらい続けた。その養蚕やめた理由は平成元年ころから中国の、まゆ、いわゆる生糸の輸入が拡大して、中国から、まゆでは輸入できなかったので、こういう品物で輸入して、これを日本に持ってきてから糸をほぐしたわけ。着物から。安物で。うちは平成 7 年までやったけれども、そういうことで養蚕する人が日本にいなくなったの。そういう昔の話なの。最盛期のときは（飯舘では）600 戸。福島県だって 1 万 5000 戸ぐらいあった。

ツタ枝：私とお父さんって、この本（「飯舘村に生きて：20 人の足跡」）にも書いてある通り、母親がきょうだいの子ども同士のいとこ同士なんですよ。私が生まれたときと、この人が生まれたときに親同士が、もうこいつらのこと一緒にさせよう、みたいな。昔だから、そんなこともあったけど。昭和 43 年に結婚したんです。そうしたら親同士が決めた。昔なんか、よく時代劇で出てくるような、いいなづけなんて言うけども。でも、それも私も小さいときに父親を亡くしていたから、お母さんの母親の言うことを聞いて、この人と一緒になりました。もう何の抵抗って、結構、抵抗もあったんだけど「うーん、どうしようかな。ああ、行きたくないな」って思いながら、高校卒業すると同時。といっても私は高校終わってすぐに農協に勤めたんです。結婚してからも仕事を続けたね。そうしながら子ども 2 人で来たわけです。小さい子どもは、おばあさんの上の祖母、まだ、いたんです。その人に子どもを 2 人とも面倒を見てもらってた。だから昔って、おじいちゃんおばあちゃんがいるから何の心配もなく。でも母乳をやるときは、うちに帰っていって、農協すぐ近くだし、あの頃、私もバイクか何かに乗っていたんだね。その頃で。だから、すぐ帰ってきて、おっぱいあげて、また出ていくとか、そんな感じで許された育児だったんだよね。そんなことで私は勤めていたの。農協には高校終わってから 20 年近く勤めた。そして辞めても何かアルバイトみたいな感じで来てくださいと言われて、忙しい時期に呼ばれてた。そんな仕事をしながら役場にも行ったし農協にも出たし。そんなことをしながら、ここに住みついたということですね。（征男さんを）高校生の頃に見たとき、なんだ、このおじさん、みたいな。ひげがもじゃもじゃで、すごい、かっこつけて歩いて。そして昔、高げたみたいの履いて、不良みたいな格好して、かっこつけてたんだよね。この人ね。いやあ、こんな気持ち悪い人と一緒にならなきゃならねえのか？とかよ、そんな思いだったの。最初の第一印象というのは。親戚でも、そんなに行ったり来たりもしないし、子どもだし、そんな結婚の対象者としては見ていないから。

「ああ、来たのか」なんて言うぐらいで、あんまりそんな話もしたことない。

征男：その当時は合併しても、そこの桜通りという道路から裏側が飯樋で。（地元で）仲悪かったの。けんかばかりして。けんかするとあっちこっち人集まって、けんかしてた。そういう仲悪い部落だった。

ツタ枝：だから、おらのほうはお前らと違ってこっちのほうが優勢だとか、何か野球大会だってソフトボール大会だって、みんな対抗意識で戦うわけだ。バレーボールなんかに草野さ行くとあの人、一番強いんだ、（１番強い）あいつのことやっつければ俺が勝つんだみたいな、そういう対抗意識でやってきたんですよ。昔は。そんなこと。だから何か面白かったよ。結婚してからは、ずっとここで一緒に暮らしているね。

２．息子との別れ

―息子さんについて
ツタ枝：2017 年の 8 月 12 日、もうすぐお盆というときに、（息子が）交通事故で亡くなってしまったんです。私とお父さんが本当に頼りにしてた長男なんだけど、それが急に亡くなって、衝撃というか、もう考えられない人生になってしまったんです。でも、息子も一緒にこの（3000 本の）桜を植えていたんです。じいちゃんが植え始めて、息子が死んだのは 2000 本終わった時だな。終わったときにマー（息子）が死んだんだか。この息子のことを思いながら植え続けてきたのが、この 3000 本につながったんです。息子がいたらなという思いで無我夢中で植えた桜の木だったんです。桜を植えるのを家族でやっていたんだけど突然いなくなって、本当にがっかりして、桜が植え続ければ息子が来て眺めてくれるだろうという思いで、それぱっかりを思って植え続けてきました。

３．震災当時について

―震災当時は、どこで何をしていていましたか？
征男：震災のときには農協にいたんです。農協の常務理事やって鹿島の事務所にいた。ちょうど会議で 3 階にいて会議していたときに地震に遭い、津波が来るのを農協の 3 階から見ていて、津波があっち（国道６号線）から来るのが分かった。だいたい 15 メーターぐらいの津波だから、国道まで津波が来た。その思い出は今もある。避難することできなくて、相馬市内のところ避難して解除になるまでそこにいた。

―家に戻ってこられたのは？
征男：時々、ここ（家）来て、ちょっと見に帰ってきて。
ツタ枝：その震災の日は、この人（征男さん）、どこもかしこも、こっちの道、近いからこっち行こうと思うと倒れた木があったり。じゃあ、また戻って、こっち側こう行こう。でも帰ってはきたんだけど。だから帰ってきたのは、その日の夜中。農協から帰ってくることができなかったから。

―ツタ枝さんは、どうされていた？
ツタ枝：私はうちにいたの。そして 3 時 40 分に地震が発生したときには、母屋にいて、何かすごい揺れが来たというので出窓をぱっと開けて、裸足で作業場に来たんだ。作業場には軽トラックとか大きな 2 トントラックとかあって、これはこのハウスが倒れたら大変だと思って、トラックと軽トラと乗用車を全部外に出した。私は外でラジオを聴いていたの。車の中で。そうしたら、すごいことになっているということで、もう電気も一時不通、全然来なかったし。でもラジオは

ついたんだよね。ラジオを聴いていたら、もう、こんなにでっかい地震はそうそうないということで、これは大変だと思って。お父さん来るのだって、おそらく帰ってこれないんじゃないかと思って、母屋の車で待っていたんだけど電気もつけられないし、どうしようもないわけよ。そうしたら、すぐ近くに親戚の人がいて発電機を持ってきてくれて、家を照らしてくれて何とか光は家に入ったんだけど。そんなことを思いながらいたら、お父さんも、すごい朝方になる頃の時間帯には帰ってきたの。だけど寝るにも寝られない。こんな思いして、「これはどういうわけだべ」なんて2人でしゃべって、そのときは過ごしたんですよね。だから怖い思いしたんだよ。

―娘さんはその時何をされていた？
ツタ枝：その頃は埼玉にいたの。ちょうど娘としゃべってたときに、地震が来て「何か変だよ。電話切るよ」と言って家の窓を開けて外に出たの。

――地震のときに。たまたま？
ツタ枝：たまたま、しゃべっていた。そして出窓から、ぱっと戸を開けて外に出た。娘とこのときにしゃべってたから、何か起きたのかと娘も思って、あっちはテレビ普通についたから見ていたんだと思うんだけど。それからは大変だったわ。次は逃げる段取りをしなければならなくていけなくて。1日目は何とかここ（飯舘村）で暮らして、南相馬の人たち津波で（飯舘村に）避難してきたんだよ。原町のほうの人が飯館の学校にもみんな避難してきた。

征男：放射能が飯館にまだ来なかったときにね。その時は来てるかわからなかったんだけど。

ツタ枝：だけど、2日ぐらいたった時に雪降ったりしたの。だから雪と一緒に放射能が降ってきた。

征男：原発が爆発して、今度、飯館の人もみんな逃げなさいとなったときに今度ここにいた避難した人が行くところがなくなった。勝手に山形に行ったり、会津のほう行ったり、埼玉行ったり栃木行ったり、みんなあちこちに逃げたわけ。

ツタ枝：全村避難という宣言ももらっちゃって。

征男：俺らは埼玉に一回行ったのさ。

ツタ枝：じいは仕事があるから。戻ったの。私は娘のところで暮らした。3月まで。（征男さんに車で）送ってもらったわけ。だから、それも3月10何日、(震災起きてから)2日、3日たってからだな。全村避難だから（避難してきた）みんなを村から出したのよ。農協の人たち、びっちり泊まってたから、「私らも、避難しろと言われてるから皆さん帰って」と言って、みんなそれぞれ帰ってもらって。それから、みんな帰ったあとに、お父さんに送ってもらいながら埼玉の娘の家に行ったの。私は。そして3月25、6日までは暮らしたんだよ。埼玉で。2週間ぐらいは続いたと思うんだ。だけど、お父さんのことが心配で1人でここには置けないと思った。

―征男さんは送って、そのまま戻ってきた？
征男：俺はすぐ（飯舘村に）帰ってきた。

ツタ枝：この人は、農協の仕事があるし、なんせ農協自体がどこに行ったらいいか分からないのよ。この人（征男さん）、営農担当だし、いろんなベコとか、いろんなものの避難をさせなくちゃいけない人なの。だから牛を大きなトラックに詰め込んで、みんなそれぞれあっちに行け、こっちに行けという指示をした人だから、この人がいなかったら駄目なわけよ。そういうわけで、お父さんはその場で私を置いて帰ったわけ。だけど帰る途中でに福島の車、ナンバーだけでも「福島のナンバー来た」というわけで、よけられて。「来んな」みたいな。農協に来るガソリン

だって、もう途中からドッキングして運ばなくちゃいけない。飯館村は入れないと言われたんだよね。あの当時のことを考えたら本当に、なんでこれまでして福島の人のことを嫌ったんだろうというぐらい嫌われたよ。ナンバー見ただけで、これ福島ナンバーだといって遠くに行かれる。そういうことをされたんだよ。だから、そういうのは、今になっても思い出す。そしてお父さんのことが心配だから帰ってはきたけど、やっぱり、あっちゃこっちゃ散らばってるし、もう、ごはんつくって待っていようと思って。ほんで私はこっち帰ってきた。

―いつごろですか？
ツタ枝：3 月の終わりの 25、6 日に帰って、土日をはさんで来た。土日しかこの人動けなかったから、土曜日に来て一晩泊まって日曜に帰ってったの。

――お二人、一度戻ってこられてから、その後の避難というのはどういう経緯ですか？
征男：避難は 5 月 20 日に相馬にちょうど部屋が一個空いていたの。

ツタ枝：一戸建てがあって、誰も住んでないうちがあったの。

征男：そこを借りて、そこさ避難した。ワンちゃんもね。
ツタ枝：二人で 6 年間相馬で暮らした。相馬は避難になっていなかった。（職場の）鹿島も避難になっていなかった。

ツタ枝：だって、相馬なら勤めが楽だったし、鹿島もならないし、放射能落ちなかったんだな。だから、勤めがあるからって相馬を選んだわけよ。私とお父さんは。休みとかには飯舘にも必ず戻ってきて、この桜を植え続けてきたんですよ。

――避難先から通って？
ツタ枝：通ってだね。

征男：2000 本過ぎてからはちょっと植えるのをやらなかったの。3 年ぐらいね。（平成）25 年の春にボランティアが来たわけだ。ボランティアが来て、桜の手入れをしたいっていうので、草刈りとかやってる内に、じゃあ今 1000 本ここで増やしましょうっていって、一緒に（平成）26 年に 3000 本植えたわけだ。だから、ボランティアがここに来てから 10 年だいたいたつんだけども、今も来てるわけよ。

―どこのボランティアさんですか？
征男：ちばとうほくボランティア、渡邉っていうのんだよ、代表がな。

ツタ枝：千葉、静岡、茨城、東京、神奈川、もう全国です。遠いところは山梨のほうからも来てる人いるし、いろんなとこで、山梨のぶどうなんかおみやげに持ってきてくれたりしてるから忘れないし、遠くから来てます。その会員は関東ですね。50 人ぐらいはこの会員になってるんだけど、ここに来るのは二十五、六人とか、このときに都合ができる人が来るから、20 人ぐらいでここ来るんです。そして、草刈りをやってくれて、あとここでお昼食べたり、寝泊まりもみんな寝袋持ってきてって感じだね。草刈りとか。田んぼもつくったの。帰ってきて、こっちに来て。田んぼも 6 年でつくって、みんなにお米もあげたのね。喜んでみんなもらっていった。ほれ、除染大丈夫だっていうことで、放射能検査しても何も出ないということでみんな安心して食べてくれた。

４．震災生活の 6 年

—避難生活の６年間というのはどうでしたか。大変なことが多かったと。
征男：大変だけども、別に仕事する範囲が決まってるから、そんなにひどいということはなかったよ。ただ、飯舘村と行ったり来たりが多かったね。村外で生活するのは初めてだったから、６年間なんて大変な時間だよ、やっぱり。慣れないこととか多かったけど、一軒家で誰も隣近所がいないから、気楽でよかったよ。

—ツタ枝さんは、避難生活の間に大変なこととか何かありました？
ツタ枝：もう、大変なことばっかりよ。だって、みんな周りがいないじゃん。人がいなくなっちゃったから、隣近所のコミュニティーなんていうのは何にもなくなっちゃって。今までは回覧持っていってちょっとお茶飲んで遊んできたとか、そんなことはあったんだけど、ここに避難してからは隣がいないの。だから、友達というか隣近所の付き合い、そういうのが全然なくなったんですよね。だから、今は私の友達、お父さんの友達とかで集まって、ここで飲んだり食べたり、そういうのはしょっちゅうやってます。そんなことをやって楽しみを見つけてるの二人とも友達が多いから今は全然さびしいという感じはないんだ。本当に毎日が楽しく、山のものを取ってきたり草刈りをしたりとか、自然と一緒に騒いでダイチャン（犬）を連れて散歩してみたりとか、そういう毎日を二人で今過ごしてるわけ。

—震災前からお付き合いのあるお友達と今でも連絡取ったり交流したりっていうのはあるんですね。
ツタ枝：あるある。

征男：春になると桜見に来て、原町のほうの人はここ（桜ハウス）に泊まっていくんだ。
ツタ枝：農協時代のお父さんのお友達、常務とか役員、理事たちがここの桜を眺めて、ここで酒飲んで、寝転がって、知らないうちに帰っていく。酔いが覚めたら帰って行くみたいな、そんなのしょっちゅうですね。だから、びっくりするぐらい楽しいですよ。

—震災前と震災後の飯舘での暮らしで変わったこと、感じること、征男さんありますか。
征男：一番やっぱり農業ができないっていうのは変わったと思う。農地は放射能除染しても山は除染を全然やってない。山のものはそっくり放射能が入ってるわけ。だから、キノコなんかは食べて駄目だよって村の新聞に出してあるんだけども、それだって食ってる人も中にはいるかもしれない。

ツタ枝：食ってる人もいるとは思うけど。
征男：あと、山の野菜とか。そういうのは食べない。

ツタ枝：そういうのは食べられないね。今もってね。

征男：でも、いくら田んぼも除染したとはいえ、やっぱり米に放射能入ってるもん。田んぼの中はやってくれても、畦畔（あぜ道）は除染してないからね。

ツタ枝：でも、測ってもらってから食べるから。

征男：そういう、同じ農地であっても畦畔も除染しないような除染の仕方の、原発のやり方っていうのはおかしいべと。だから雨なんか降れば入ってくる。

—震災前っていうのは飯舘に暮らしていて、原発のことを意識したり考えたりすることは。
征男：あんまりなかった。こんな事故起きるっていうことは誰も想像してないから。まして、地震があって苦しんでるとこに原発事故だから、二重の苦しみ。津波に遭った人はな。だから、今も双葉地方では自分のうちに戻ってくる人なんかは１割、２割じゃないの。飯舘だって３割ぐらい

だよ、帰ってきてる人。みんな家ないんだよ。4500 戸ぐらいで 6300 の人口あったんだけども、今はここに戻ってるのが 1500 人ぐらいですね。あとみんな福島とかそっちこっち行って戻ってこない。だから、ここに残って人たちで敬老会あるんだけども、75 歳以上がここに 1000 人いるんだ。4000、5000 もいたのに 1000 人が老人。結局、少子高齢化で子どもがいないから、いるのは老人だけだから、みんな死んでいくんだ、毎日。そういう村なの。だから、これから飯舘村はおそらく村はなくなるっぺと。子どもがいないから。出てくるのは猪と猿と熊、そういうのが出てくるのよ、今は。で、この家の前まで来るんだよ。猿だって 100 匹ぐらいずつ来るんだから。

ツタ枝：今までは全然そんなことなかったの。動物なんか何も出てこない。鍵だって車の鍵取ったことなかったし、うちだって鍵なんてかけないで普通に夏なんて戸開けっぱなしで寝てたんだから。それだけど、今は厳重に全部鍵取って鍵閉めて。

征男：戸の鍵なんていらねえなんて言ったんだよな。

ツタ枝：本当に昔と今、震災後で変わったのは、そういうとこだね。安心して暮らせないじゃん。そんな動物がいたら。生ゴミなんかあったら、うちの中まで入ってきて。うちはこういう囲いがあるから入って来ないけど、近くまで来てるんだよ、田んぼのほうまで。そのすぐ前の田んぼ。そこ、真っ黒になってるわけよ。ゆうべもここに来たんだ。足跡があって。だから、本当にそういうところは変わったね。動物が勝手に出回ってるし、増えたし。猿なんてすごい。大倉の道路なんて行くと、舗装されたあったかい道路の上で寝てるんだから。ほんで、運転していくと、ピピーっとそれこそ急ブレーキで止めたってよけねえんだよ。ほんと、もう慣れっこになってて、なんだ近くまで来たからよけっかみたいな感じなの。本当に、あの猿。

―ひきたくはないですね。
ツタ枝：ねえ。そんなこと嫌だよね。そんな感じだよね、今は、この暮らしは。

５．桜

―桜を植え始めたきっかけは何ですか？
ツタ枝：この（飯舘の）住宅の新築祝いだよ。母屋のほうをつくったから、そのときの家の周りに植えたの。

征男：住宅はね、平成 9 年につくったわけだ。9 年につくって、飯野村は何もなかったから、飯野までのうしろさ 50 本くらい（桜を）買って植えたのが始まりで。桑園だったからじゃあもっと植えましょうかということで、そこに植え始めて、1 年に 300、400 ぐらいずつ植えて。そして、1000 本植えて。今度は 2000 にするかということで、そのときは息子もいたから 2000 本に達するまで植えたの。それが震災前に終わったんだけどもね。

―桜の種類も様々なんですか？
征男：種類はいろいろ、ボランティアの方からもらったのもあるけれども、主なものは吉野桜と大山桜、これが主役だな。

―桜というのは植えたらお手入れとか水やりとかしなきゃいけないものなのですか？
征男：いや、定植してからはそんなにやることない。あとは、20 年ぐらいたってくると、桜の病気が出てくるの。てんぐ巣病というやつと、あとはコケっていうのが生えてくるんです。白っぽいので空色の、木の表面に付いてくるの。これ、そのまま放っておくと木が窒息して死んじまうの。てんぐ巣病っていうのも、そのまま置くと、木がそのてんぐ巣病に負けて、木が枯れちゃう。桜が花咲かなくなる。そういう病気がある。それの手入れをしなきゃいけない。でも、年取って

くると木が伸びていくから、木に登らんといけんが、年寄りだから、それが今度ひどいのよ。一本木にはしごをかけて。一番最初に植え始めたものも、今ありますよ。それは最初だから平成 9 年に植えたやつ。

―震災のあとのその避難生活の間の 6 年間も行き来しながらお手入れは続けてらした？
征男：草刈りに来たこともあるし、相馬にいた人から、土地も借りてたから、そこでキュウリつくったり花つくったりもしてたの。

―もし生まれ変わったとしても、この飯舘の土地で同じようなことをしますか。
征男：今言ったように、われわれは 80 歳だから、埼玉にいる娘が、旦那が埼玉県警だから、それの勤め終わったらこっち来るって言うんだよ。そして、農業はしてもしなくても、ここは自然がいいから、都会よりここのほうがいいって言われて、ここで暮らすっていう、そういう話はしてるの。だから、子どもたちの孫も。

ツタ枝：来たいとき来てね。

征男：孫は警視庁さ行ったわけだ。で、終わったらここさ来るってことで、今、勤め何年あんだかな、まだ 60 にならないから、勤め終わったら来るって。あと、5 年ぐらいで来るかな。

ツタ枝：そしてね、うちのほうの娘の旦那は、「俺としては警察の仕事持ってるから、福島県警だって原町の警察だって、この近くの飯舘のおまわりさんだって何だってできるから、俺は早めに帰るよ」って言ってるの。いや、そんなら、私ら、私とお父さんとしてはね、なんぼでも早く帰ってきてもらえれば、これに越したことはないと。だから、喜んでる。娘は、なんせ一人しかいない娘だから、お父さんとお母さんを面倒見るのが私だと、そういう気持ちでずっと来てるから、今朝も電話で「今日は福島大学の生徒さんが来るんだよ」って、「じゃあ格好良くしてなさいよ、お母さん」とか、そんなこと言ってるけど、そんな娘が今いるから、だから私は一人でも娘いたからよかったと。で、孫も 2 人男の子、娘はいるんだけど、下のは高校 2 年生で、これから大学と就職やるんだけど、下の子がだいたい進路決まればここに来るということで、それだけお父さんとお母さんは長生きして体に気を付けて頑張ってっていうようなことだね。

―素敵ですね。じゃあ、帰ってこられたら一緒に桜植えたりとか。
ツタ枝：そうそう。手入れとかねあとは、娘も花が好きだから、いろんな場所、こんなに広い場所があるから、花を植えて咲いたところを眺めるとか、そういうのをやっていけば一日あっという間にたっちゃうし、娘は何でも、パソコンの先生やってたもんだから、いろんな人が来ても、この前の 1 週間前、2 週間ぐらい前もここ来て、ちょっと会ったんですよ。オンラインでお話するのに。そうしたら、「ばばとじじはパソコンもないし、そんなこといじれません」って言ったの、「そうしたら、いいよ、私が行くから」って言って、娘は来たばっかり。だから、しょっちゅうここには来るんです。そんな感じで、娘が何でもやってるんです。いろんなところから、QVC っていうところから取材が入ってて、それはオンラインだったの。オンラインでパソコンとパソコンでしゃべるのに、ばあちゃんパソコンいじれませんって言ってるの。だって、パソコンもあっちにある、昔のはあるよ。そんなの今はやらないから、もうノートパソコンだからって。「そんなの、ばあば使えません」って言ったら、「私が行くから心配しないで」って。だから、そういうことで娘しょっちゅう来ます。そのときは電車で来て、ばばとじじが迎えに行ったり。あと、自分で運転して来るときもあるんだけど、でも、結構運転大丈夫で、空いてたからすいすい来たとかよ、そんなことで通ってもらってる。

――お孫さんたちも来ることはあるんですか。

ツタ枝：孫は夏休みとか冬休みとか、休みはここでほとんど暮らしてる。ちっちゃいほうはね。お兄ちゃんはこれから警視庁で、教育係のほうさ行っちゃうから、今度は来られないと思う。でも、この前、娘と一緒に来て帰ってきたばっかり。じじからお祝いの大金もらっていったよ。もうばばとじじね、あとそんなに来れないからねなんて言って、行った。だから、じじばばも、まあまあ、さびしくはないんですけど。あと息子の子どもが女の子 2 人いたんですよ。それが相馬にいるんです。その子は、男の子 3 人も子がいて、今サッカーやってるんです。5 年生と 4 年生と 1 年生なの。その男の子ばっかり 3 人が、今サッカーの練習で全然来れないんだけどね、ここには。もう空いた日がないんですって。それはしょうがねえなあって言って、じじばばもあんまり会えないでいる。でも、飯舘の球場で一回やったことがあるのね。それで、飯舘のときは 2 人で見て、「頑張れー、頑張れー」とか言って応援したんです。「サッカー選手になるの？」って言ったら、「そうだよ、日本代表に出るんだよ」なんてやってる、まだまだ 4 年生、5 年生が。まったく面白いんだよ。この家庭、会田家は走りが速いんですよ。だから、大きいほうのお兄ちゃんだって、ずいぶんすごかったよね、100 メートル走なんか 1 位、2 位だから。本当にあの子なんで速いんだっていったら、お兄ちゃんは僕はじいじと一緒に裏山走り回ったから、上手なんだよとか言ってるんだよね。小さい頃ほとんどここで暮らしたからね、息子たち。私が添い寝して寝せたりして、そんなやって育ててたから、この自然にはたくさん触れてるわけよ。ある日、「ターザンもやったし」とか言って、「ターザン？」って聞いたら、「じじがこの枝からそっちの枝に行け」って言ったんだとか言って。面白い子だよ。

――そうすると、避難されている 6 年間は放射能の問題とかもあって、お孫さんとかもなかなか。
征男：あんまりは来なかった。

――心配はありましたか。
ツタ枝：いや、全然こっちには来なかったもの。

征男：相馬さ行ってたから。ここさは泊まらんねえ。ここは泊まって駄目だって。

ツタ枝：泊まれないから。そしたら、この下の子は生まれたばっかりだったの。その頃。ほんで、相馬がじじとばばのうちだと思ったって。今、大きくなって言うけど、なんだここが実家かみたいな、なんで僕はあっちに行ったんだみたいな。だから、生まれたばかりで避難していたから、あっちが本当のうちだと思ったって言ってる、今も。

征男：あっちは一軒家だったから。だから、広くて。

ツタ枝：本当に何にもない、本当の、こっちの母屋と同じようなつくりだったのね。で、誰も入ってなくて、そこで 6 年暮らしたから、あっちだと思ったっていうの、小さい方の孫はね。

――今でも気を遣ってらっしゃいますか。
征男：山のものはだめだね。
ツタ枝：今ではね山のものは食わないけど、野菜は全部測ってもらってるし、ゼオライト全部畑にまいて、キノコもそこでつくってるのは食べれるんだ。
征男：いや、それでもやっぱり放射能入るんだ。入ってるけども、食べてもいいよっていう基準よりは下回ってる。
ツタ枝：あれから十何年もたってるから、もうそろそろね、食べてもいいかなって感じはしてるけど、山のキノコはまだ食べれないね。
征男：でも、食ってる人はいるんだよ。例えば松茸とかな、イノハナなんていうのは、これ、食ってるから。だって、一本で 3 万も 4 万もするんだもん。
ツタ枝：ここで食えないからって、猪苗代さ行って野菜とかキノコとか売ってる、道通りにあるんだよ、売店がいっぱい並んで。そこまで行って、紅葉眺めながら、じゃあ猪苗代まで行って買

ってくるかなんて言って、ずいぶん買ってきて食べたけど、でもそれだって会津のほうにはないとしても、危ないとかね、やっぱり言われると、なんだここまできてるのかみたいな。でも、売る人は全然ないから、ここ大丈夫だからって言って売るんですよね。そして、宅急便で送られてきた箱まで見せて、「ほら、こいつは会津のほうのでしょう」なんて言ってね、私らに見せるんだけど、「分かりました。じゃあ、これもらいます」なんて言ってね、買ってくるんだけど、そうやって何回か避難中も食べてはいるね。イノハナが食べたいって言うからね、あの香りが良くて、松茸よりはイノハナだもんね、やっぱり、どっちかっていうと。
ツタ枝：イノハナって知ってる？　香茸っていうんです。黒いので、こんなんなって、でっかくなるとこういうの。それが香茸っていってすごくおいしいのよ。
ツタ枝：独特な香りなの。
征男：松茸よりおいしい。
ツタ枝：松茸はお酒に入れて、ちょっと入れて飲むと香りがするみたいなだけで、あの一本では大したね、あんまりおいしいって感じないんだけど、そんな感じかな。

――今、桜 3000 本って聞いたんですけど、これからもっと増やす予定はあるのですか。
征男：いや、あとは山の木を切って桜の木を植えることになるからもう増やさない。これでもう限度だ。

ツタ枝：でも、増やさないと思っても、あちこちから結構もらえるんですよ。これを植えてもらえれば、「私らが来たとき、私らが送った桜の木がこんなに大きくなった。」そういうのを見たいって。そんな桜の木にはお父さんが札を作って誰の木だってわかるようにしてるから、寄付した人だって喜ぶわけよ。

――何か困っていることなどはありますか？

征男：猪がいっぱい増えてきたべ。堆肥を入れて植えた桜は、堆肥の匂いがするから猪が掘るんだよ。堆肥を餌だと思って、ものすごい太い木まで掘るよ。根っこのとこにミミズがあるっていうことを鼻で判断して食べるんだよ。

ツタ枝：木のほうが弱っちゃうわな。倒れてるのもあるしね。あと、ボランティアが間違って切ったりしたのもある。「桜切って駄目でしょ」なんてじじに言われるんだけど、ボランティアの人たち、全然気にしないから。みんな仲間だと思って、「あ、ごめんなさい、ごめんなさい」とか言ってるだけ。本当、面白いよ。ここ（桜ホール）に飾ってある写真全部、ボランティアが飾ってるの。お母さんがダイちゃん（息子）と一緒に撮った写真とかを貼ってたに、どこに行ったんだと思ったの、今見たら全然ねえんだよな。あれ、そっちのほうさ片付けてあった。ボランティアの人たちはほかにも、ドローンで、桜をライトアップしてくれる人がいるの。そういう人もお母さんとお父さんと友達みたいに付き合ってる。この復興の桜ののぼり旗 3000 本って、これだってみんな勝手に持ってきてくれるんだよ。お金かかってると思うんだ。だけど、ボランティアだからお金なんか出したって取らないし、本当にありがたいだけ、こんなにいろんなでやってくれてる人が周りにいるんです。飯舘の人でなくて、よそのほうから来る人たちなんだけど、その人たちがこれつくってくれて。桜があってこういう関わりができたから、平成 9 年から植えた桜はやっぱりよかったなって、今も思ってる。

征男：新築祝いとか家族のための桜が、復興ってなってるから。

ツタ枝：ほんで、この記念碑、（記念碑の写真を指しながら）復興のこの石碑が、じじが常務時代に農協で考えたんですよ。ほんで、「復興の桜、村民の絆づくり」っていうのを考えて、彫ってもらったわけ。

征男：震災が 3 月だけど、これはその年の 10 月につくったんです。そして、その次の年に俺が作詞作曲した『復興の桜』っていう歌をつくった。

ツタ枝：じいは歌が好きだけど下手くそ。

征男：歌を歌う、大声あげる人っていうのは肺が丈夫になるから、命が長くもつの。

ツタ枝：だからね、これから年取っていくだけだから、いかにしたら元気で過ごせるか、私は食事のほう、野菜とか肉とか魚とかそういうの食べさせてあげないと思って。だから、認知症にもまだなってねえかなと思いながら。

征男：（写真を指しながら）これ、ドローンで撮った写真。田んぼに「いいたて」って書いてあるの。2018 年の 10 月から 11 月に GoogleMap に載ったの。これを見つけた人がいたの。これ、田んぼを焼き増ししてるの。ボランティアがはじめてつくった稲やった。この時は、手で刈ったり植えたりした。

――「復興の桜を守る会」は、いつに立ち上げたんですか？
征男：この石碑つくった震災後の 10 月に。

ツタ枝：お友達全員でこの桜を復興の象徴にしようとしたの。毎年桜の時期にここで出店が出るの。焼き鳥、焼きそば、綿飴とか、お母さんが豚汁なんかつくったりするときもある。あと、農協がジュースとかビールとかお酒を持って、販売するんだ。

ツタ枝：じいとばあも年だから、みんな勝手にやってって言おうかなと思ってるんだけど、人の顔見るために、携わってはいるね。

征男：友達とか昔住んでた人とか、全然見たことねえ人とかも来るね。

ツタ枝：だから、いろんな人と話して、楽しんでるだけ。

――これから、お二人の代から娘さんの代に引き継がれていくのかなと思うんですけどどう続いてほしいですか。
征男：一番はやっぱり、てんぐ巣（桜の病気）とコケの取り除きをやる。これをやらねえと桜が枯れちまうから。これを誰かやってくれる人いねえと駄目だ。
ツタ枝：こういう若い人（ボランティアの写真を撮りながら）なら大丈夫だな。梯子の上乗っかって、ノコギリでこうやって切ればいい。力もあるし、来てもらえれば大丈夫だよな。やる時期は決まってないから、来年も来てほしいね。

征男：高所作業車とか木から落っこったりしたら怖いな。落っこって怪我したら、誰が補償するのかっていうような。

ツタ枝：もちろん、保険に入ってもらわないといけない。

征男：作業車は、4 メーター、5 メーターって伸びるのがあるの。ノコギリが 3 メーターあるから、7 メーター8 メーターぐらいのは切られるんだよ。

ツタ枝：だから、平らなところはそれでできるの。

征男：でも、それは、みんな下が、地盤が平らならいいけど、山さ行けば平ではないから、山は使えねえ。

征男：ひっくり返ったら大変だもん。だから、山さ行くと梯子使わねえとな。梯子だと、二段梯子で 8 メーター登るから。

ツタ枝：そうやって切るしかねえ。

征男：ロープ体さ結わくけど、落っこったらちょっと大変だから。まあ一回花見て、花見ないと駄目だな。来春はまず来てな。4 月の 15 日前後。そこならばええ格好に見える。

６．もしもの備え、互いの尊重

―僕、岡山の出身なんですけど、6 年前に西日本豪雨災害というのがあって、規模は違うんですけど僕も被災した経験があります。そうした経験から福島大学を選んだというのもあるんですけど、やっぱりいつ被災するかなんてあんまり考えていなかったと思うんですけど、実際に被災して避難したときとか、こういう備えをしておけばよかったなとかとがあれば教えてほしいです。

征男：飯舘の場合は、津波っていうのはいくら大きい津波でもここまでは波は来ないわな。恐ろしいのは地震だよね。地震というのは、これは何ともよけようがない。なったら、やっぱり外に出るほかないんだよ。まず一番は外さ出ること。都会の場合はまた考え方は違う。都会で今、震度 5、6、7 くらいの震度だけども、これが 9 とか 10 とかっていう震度になれば、都会の建物は全部ひっくり返るから、ひっくり返れば道路は塞がるから、どこさも逃げようがないんだよ、田舎と違って。田舎は建物がないから道路は空いてる。道路の状況によって車が走れないときは駄目だけど。都会の場合は建物がひっくり返ったら、絶対、誰もどこも動き取れなくなる。これは考

えておかなきゃな。

――ツタ枝さんはいかがですか。
ツタ枝：いや、同じ。やっぱり備えって何もしてなかったの。私だってまさかこんなでっかい地震が来るっていうことなんか思ってもいなかったし、全然安心安全で暮らしていると思ってたから、普通だったから今はこういうバッグに詰め込んで 3 日 4 日大丈夫なようにいつでも持ち出せるようにっていう話、今になっては分かったけど、その当時は何も心の中にはなかったんです。だから、もちろん私らはその割には全然食うものもなんでもある、地震も大したことなかった、だから私としては今何不自由なくうちにあるものを何でも食べれる、そういうことでこれからのやっぱりでかい地震があったら、お父さんが言うみたいにやっぱり心の備えっていうのは常につくっておくべきかなっていうふうには思いますね。特に都会の人たちとかはね。今、どのテレビ見たって、能登半島だって今通れない、もううちは曲がってる、一個一個どの道路も分断してもう前に行けない、孤立状態って、そういうのをやっぱりテレビで見ると、間近にこういうのが今迫っているんだなっていうのを、私らはここにいてそういうのを見てやっぱり少しずつ何かの備えだけはしておかなくちゃって思ってる。

――夫婦円満の秘訣はなんですか？
ツタ枝：じいもばあも、お互いを理解して尊重するっていうこと、その人を、お父さんを尊重するし、お母さんのことをお父さんは尊重する。そういう気持ちがないとけんかしたり、ダーダーって、言い合いにもなるんだ。でも私とお父さんは本当にね、仲が良くて有名なんだ。別に仲良くしてるわけでもないんだけどもね。常日頃の言葉遣いとかこういうの、みんなが来たときに聞いてもらうと分かるんだけど、全然けんかしたってないんだよ。本当にけんかはしないよ。なんでなんだろう、不思議だよ。

――征男さん、いかがですか。
征男：いや、けんかしたって俺勝つから。

ツタ枝：だから、最初からしない。

征男：最初から俺が負ければいいの。

ツタ枝：そういうふうに理解してるんじゃない？何か面倒見がいいの。そういうのはあるね。そういうふうに二人とも理解しあうことが一番大事だと思う。これから皆さん誰かと結婚したとき、このおじいちゃんとおばあちゃんのことを思い出して。「ああ、そうか」って、旦那さんをちょっと理解していいところを私も真似しようか、そんなちょっとしたとこだと思う。仲良くできると思うよ。